

# 危機の中で精神の平衡を保とう

新型コロナウイルスに私どもはもう2年以上もさらされてつづけている。第7波の見通しも不透明らしい。まだしばらくは気鬱な日常を余儀なくされるのであろう。ロシアによるウクライナ侵攻の、映画のフィルムリールを七十数年前に逆回したかのような、正視に耐えない凄惨な画像を毎日のようにテレビや新聞でみせつけられていく。この戦争もにわかには終熄しまい。

## 山頭火が再ブームに

不安障害や強迫神経症に悩まされる人々が、子供を含めて相当数発生しているといわれる。無理もないことだと思う。特段の症状をもたない人々であっても、いつもとはちがう抑鬱的な気分を漠然と感じながら日々を過ごしているのではないか。私自身がそうだ。精神の平衡を保ちながら毎日を何とか凌いでいきたいものだと思つてく。

えは全8巻の『山頭火全集』が春陽堂から現在、刊行の最中である。過日、銀座博品館劇場で山頭火生誕140年を記念して創作劇「きょうも隣に山頭火」が、この句人に縁の深い熊本県の俳優や歌手たちによって演じられた。シナリオを熊本日日新聞OBの井上智重氏が担当し、山頭火を浜畑賢吉氏が演じた。コロナ禍にもかかわらず600名を超えて集まった観客は、何やら穏やかな表情で劇場を後にしたように私には感じられた。劇の始まる前の45分が与えられ、私も「山頭火―死を生きる」を講演させてもらった。

放蕩を繰り返す家産を崩落させて行方知れずの父、耐えられず自宅の古井戸に身投げした母、山頭火はこの過去への執着に引きずられ、ひたひた、たひたひたと各地を歩き、生きて在ることの寂寥を季節や定型にこだわらない自由律句で歌いつづけた。

## 正論



拓殖大学顧問 渡辺 利夫

### 心の苦しさを「代償」

いつまでも死ねないからだの爪をきる。

私は不安や抑鬱の時には、書架から山頭火の句集を取り出し、付箋のついたページを開き傍線の引いてある句に目をやり、心の中でこれを繰り返す。墨染の法衣、網代笠、右手に杖をもって静かに歩く山頭火の後ろ姿が目の中に浮かんで来て、私の心はいつの間にか、ほうと癒やされている。

生死の中の雪ふりしきる しづけさは死ぬるばかりの水が流れて

「代理苦」という表現がある。煩惱に捉えられ悟りの境地に至ることなど到底できない凡夫の苦しみを私どもにかわって引き受けてくれる菩薩の行の一つだといふ。

朝鮮で終戦を迎えた五木寛之氏のつらい日常を支えてくれたのは「湖畔の宿」とか「サーカスの唄」とか「赤城の子守唄」とかいって、当時の歌謡曲だったという。「悲しい時には悲しい歌を」という氏のエッセイの中にそうある。コロナ禍にあって人々を元気づけようと「上を向いて歩こう」があちこちのテレビなどで歌われていたが、今はもうやっていたいな。やっぱり五木ひろしや八代亜紀のような名手の歌う「演歌の花道」などの番組の方に引き寄せられてしまふ。

心を慰めてくれる何か

1990年代初期のバブル崩壊の頃、山頭火ブームが到来したことがあった。関連する著作が出版され、テレビでドラマ化されたりもした。欲も得もなく、ただ漂泊に身を任せ、生きて在ることの物寂しさを吐息のように漏らしながら歩く山頭火は、不況下で苦しむ人々の放浪願望をわずかではあれ満たしてくれたのではないか。心理学でいう「代償行動」をやってくれる人物が山頭火だったので

ないか。山頭火の句には、バブル崩壊期、このコロナ禍やウクライナ戦争で胸を塞がれて毎日を通す私どもの心を慰めてくれる何かがある。咳をしても一人

誰もが知っている尾崎放哉の自由律句である。学歴エリート之道を駆け落ち、不治の病を抱えて朝鮮、満州、京都、神戸、若狭、小豆島を転々、引きずる死の影を清澄に歌い上げたもう一人の句人が放哉である。

修辞のすべてを濾過し、わずかに残る七文字だけで人間のどうしようもない寂しさと人生の深い悲しみを表現するこの才能の高さには、驚嘆すべきものがある。胸の奥の空洞、乾いて攻め上がる痛み、近づきつつある死への惻々たる思いをこの七字は隠し持っている。

コロナ禍、ウクライナ人の惨状に心を深く痛めつけられつつも、精神の平衡を保ちたい。「悲しい時には悲しい歌を」か。この機会に山頭火と放哉をもう少し本気で読み込んでみようか。

（わたなべ としお）